

現代咬合論はどこから来てどう研究されてきたのか—咬合論を学ぶ人には必読の書

Lundeen & Gibbs

The Function

Of Teeth

現代咬合論の原点

Harry C.Lundeen・Charles H.Gibbs／著
藤本 順平／監訳

●アメリカの咬合の権威である Dr.H. Lundeen と下顎運動研究の第一人者である Dr.Charles Gibbs の咬合研究の軌跡と成果を網羅。原著者らの集積した下顎運動研究データを、補綴臨床と直接関連づけて解説しながら、具体的な臨床法や症例も呈示し、下顎運動を通じて現在の咬合論をわかりやすく解説。

●原著者らは、0.125mm の精度で記録再現することを可能とした Gnathic Replicator の開発から記録採得まで、25 年間に及ぶ膨大なデータを蓄積しているが、なかでも作業側顆頭、非作業側顆頭の機能中の詳細な分析データは、1970 年代以降の咬合器そのものや、その調節機構の発達に多大な影響を及ぼした。

●特に 1973 年の Dr.H. Lundeen, Dr.C. Wirth によるイミディエートサイドシフトについての分析報告は、その後の咬合器の構造を一変させたといわれている。

●本書はまさに現代咬合論の根拠と原点を提示した、咬合論を学ぶ人には待望・必読の書。

A4判／128頁／オールカラー

定価 18,900円 (本体 18,000円+税5%)

ISBN978-4-263-44241-8

主な目次 C O N T E N T S

Chapter1 研究デザイン

1. ナシックレプリケーターの開発
2. 記録装置の取り付け器具
3. リニアトランスデューサー測定器
4. 記録とデータの保存
5. データ説明のための多重ディスプレイ
6. タイミングと顎の位置の重要性

Chapter2 下顎運動パターン

1. 典型的咀嚼サイクル
2. 作業側の特徴
3. 非作業側の特徴
4. 切歯点における所見
5. 古典的な“後方歯牙接触位(RC)―中心咬合位(CO)”間の滑走
6. 閉口時、下顎が中心に戻るために犬歯の果たす役割
7. 小児と成人における咀嚼パターンの比較
8. 発声
9. 摩耗していない歯牙と摩耗した歯牙の咀嚼運動

Chapter3 顆頭の動き

1. 関節結節
2. 咬合器に再現された関節結節の形態
3. Stuart咬合器の歴史
4. 天然歯の修復に対する平衡咬合
5. StuartとLeeの装置の比較
6. Leeの研究法の貢献

Chapter4 側方位の顆頭の安定性

1. 顆頭の運動能力
2. 誘導された顆頭側方移動の限界路
3. 水平面におけるベネット運動の影響
4. 咀嚼時のベネット運動
5. 咀嚼のスーパースト 映画フィルム
6. 犬歯の咬合面形態の研究 犬歯の運動の多様性のまとめ
7. 犬歯の限界運動のプロット
8. 関節結節と犬歯およびベネット運動の犬歯への影響
9. ベネット運動と犬歯の修復治療
10. 犬歯の修復治療とアンテリアガイダンス
11. 簡略化された顆頭の運動記録装置

Chapter5 咀嚼および嚙下時に生じる力

1. 咬合力とEMGの結果
2. 正常咬合および不正咬合の被験者における顆頭の垂直的移動
3. 不正咬合に対する筋力の反応
4. III級の不正咬合

Chapter6 天然歯の形態

1. 歯牙解剖学教育
2. 計測器システムの発達
3. 治療例

医歯薬出版株式会社

〒113-8612 東京都文京区本駒込1-7-10 TEL.03-5395-7630 FAX.03-5395-7633 <http://www.ishiyaku.co.jp/>